

論文の要旨

<p>ふりがな 氏名</p>	<p>よこやま りゅういちろう 横山 竜一郎</p>
<p>論文題目</p>	<p>John Donne: The Making of a Poet, c. 1590–1676</p>
<p>論文の要旨</p> <p>本研究は、初期近代イギリスの詩人ジョン・ダン（1572–1631）の1590年頃から1676年までの期間における詩人像の形成を論じる。この時期に詩人としてのダンをつくるのに大きな役割を果たしていたのは、彼の直接の友人たちであった。本博士論文では、詩人としてのダンの形成を三つの時期（初期、中期から後期、死後）に分け、三部構成でそれぞれの時期において重要な貢献をした友人たちの事例が考察される。そうすることで、ダンの詩人像を唯一の静的な一面としてではなく個々の人間関係の力学によって構築される複雑な集積として捉えるのが本論文の目的である。</p> <p>序章では、まずダンが詩人として論じることの意義を主張し、次いで考察の時期を1590年頃から1676年までに限定する理由を述べ、最後に各章のアウトラインを眺める。続く部分の理論的背景を明確にするために、ダンにとっての友情の価値を強調し、それが詩の媒体やジャンル、他の作家の作品との間テクスト性といった重要な論点といかにつながるかを説明するのが主な目的である。</p> <p>第一部（第一章から第三章）では、1590年頃から1590年代後半までの、ダンが詩作を開始した初期の時期を扱う。彼の詩人としてのキャリアは友人への書簡詩を書くことから始まったため、本パートでは彼が最も多くの書簡詩を送ったローランド・ウッドワード (<i>bap.</i> 1573, <i>d.</i> 1636) およびトマス・ウッドワード (<i>bap.</i> 1576) の兄弟が取り上げられる。</p> <p>第一章は、ダンの初期の詩人としてのキャリアを論じるのにウッドワード兄弟に注目する意義を述べる。初期近代の作家のキャリアの要件のひとつに、古典と同時代の文学的伝統への介入という要素があったが、ダンには1590年代に書簡詩というジャンルの確立に意義深い貢献をしていた。特にウッドワード兄弟には多くの書簡詩が送られており、兄ローランドはダンの詩の本文の重要な記録であるウェストモーランド・マニユスクリプトを作成し、そこにはトマスからダンへの返信となる書簡詩も掲載されている。このことに注目し、続く二つの章で二人宛ての書簡詩群を検討する。</p> <p>第二章は、トマスに送られた四篇の書簡詩ならびにトマスからダンに送られた一篇の書簡詩を、ソネットとオウィディウス風書簡詩という二つの文学的ジャンルのなかに位置づける試みである。ダンの書簡詩のうち三篇は14行で構成されているが、いずれも典型的な（ペトラルカ風、シェイクスピア風、またはスペンサー風の）脚韻構成にはなっておらず、そこにはダンがソネットの形式に実験的に挑戦しようとした形跡が見られる。また、ダンとトマスの詩のホモエロティックな描写がオウィディウス風書簡詩の伝統を示唆することから、一連の書簡詩に一種のシーケンスが新たに読み込めることを明らかにする。</p> <p>第三章は、ローランドに送られた五篇の書簡詩を、ルネサンス期に流行した親密な手紙、およびホラティウス風書簡詩という二つのジャンルのなかに位置づける試みである。前者にはダン個人のプライベートな声が、後者には文学的伝統におけるパブリックな声が主に表れているという立場をとり、一連の書簡詩にトマスへのものとは異なる性質のシーケンスを示すことで、そこにダンの詩的キャリアを見出すのが本章の目的となる。</p> <p>第二部（第四章と第五章）では、1590年代から1631年までの、ダンが詩人として成熟した中期から後期の時期を扱う。この期間のダンには自らの詩風を洗練させ、同時代の作家との文学的交流を通じて影響力を高めた。本パートでは、彼の最初の詩における弟子とも評されるエドワード・ハーバート（1583–1643）とのテクスト的交流に焦点が当てられる。</p>	

第四章は、まず二人の関係を伝記とテキストの両面から探り、彼らの友情が知性への信頼という紐帯によって結ばれていたことを指摘する。そのうえで、両者を関連づけるテキストにはいずれも真理を追求する賢明な話者の構築という目的があることを主張する。本章の後半では、1590年代にダンが書いた諷刺詩とハーバートの1608年の諷刺詩「国家の悪の進歩」とを比較し、ハーバートの哲学書『真理について』も参照することで、その実例を提示する。

第五章は、ハーバートの諷刺詩を着想源としたダンの1610年の書簡詩「ジュリヤーズにいるエドワード・ハーバート卿へ」と1631年のダンの死に際してハーバートが手向けた「ダン博士へのエレジー」を取り上げ、諷刺詩で語られた真理についての哲学的問題がその後のやり取りでも継続していたことを詳らかにする。最終的に本章では、ハーバートのエレジーにダンの諷刺詩や書簡詩へのアリュージョンが含まれているだけでなく、ハーバートは偉大な先輩の詩人を称賛するために相応しい言語を使用して、真理の追求を語り合った友人たちの軌跡を刻んだと主張する。

第三部（第六章から第八章）では、1631年に亡くなったダンの死後を扱う。1633年の死後出版詩集以降、彼は詩人としてさまざまに表象されるようになったが、本パートでは彼の名声の確立に最も重要な役割を担ったアイザック・ウォルトン (*bap. 1593, d. 1683*) の著作が読解される。このパートが扱う時期の終わりとなる1676年は、彼の『釣魚大全』最終版の出版年にあたる。

第六章は、ダンが聖職に就く前に自らの監修によって詩集を出版しようとしていた計画の顛末を議論の出発点として、彼の作品の意味が社会的・物質的なコンテキストによって規定されるようになった次第を複数の事例と共に論じる。なかでも、1633年版詩集にエレジーを寄稿し、1635年版詩集にはエピグラフの執筆と編集に携わり、1640年以降にはダンの伝記を改訂出版し続けたウォルトンによる言説が注目される。彼はダンの恋愛抒情詩「嘆くのを禁じる告別の辞」を伝記で引用し、ダンの結婚生活と後の回心のナラティブに紐づけたが、本章では、ウォルトンが自らの目的に合わせてダンの詩を用いた別の例として、『釣魚大全』で引用される「餌」という釣りをモチーフにした恋愛詩を導入する。

第七章は、ウォルトンにとっての釣りの価値を知るために、彼が理想的な釣り人であると称えたヘンリー・ウォットン (1568–1639) を議論に呼び込む。ウォットンはダンとウォルトンの共通の友人であり、両者を接続する重要な人物として位置づけられる。本章では、『釣魚大全』においても引用されるウォットンの釣魚詩をウォルトンが推奨する瞑想的なレクリエーションとしての釣りの描写と併読することで、優れた釣り人にとっての釣りの時間はただの気晴らしや楽しみだけでなく自然や友人という恵みを与えてくれる神への感謝を誘うものであったことを指摘する。そのうえで、十七世紀にはダンの「餌」をウォルトンの作品とするマニュスクリプトもあったが、実際の釣りを軽視するダンの詩風はウォットンのものとは相容れないことを確認する。

第八章は、ダンとウォットンの釣魚詩の比較によって、ダンのものはウォットンやウォルトンが賛美する釣りの営みをむしろ否定しているという前提のもと、それではなぜそのような詩が『釣魚大全』で引用されているのかを考察する。先行研究では、ウォルトンはダンの釣りに対する態度を批判する目的があったという説が提出されてきたが、本章はそれをウォルトンによるダンの回心のナラティブの構築の一部だと主張する。特に注目すべきは、『釣魚大全』は狩猟家が釣り師と出会い釣り人へと転身するというプロットで展開し、ダンの「餌」は宗教的回心に似た変化を遂げる前の狩猟家によって朗読される点である。ダンの伝記において、ダンと妻のアンとの激しい恋愛とその結実としての恋愛詩が回心のナラティブに使用したように、ウォルトンは「餌」を回心前のダンの心性を表す作品として捉え、狩猟家とダンの回心を重ね合わせたというのが本章の結論となる。

結章では、三つのパートで論じられた三つの事例についてまとめたうえで、それらの主な論点を統合したダンの作品として「三重の馬鹿」という一篇を読解する。ダンの恋愛抒情詩集『ソング・ソネット集』に収録された他の詩と同様、この詩は劇的な設定における恋する話者のモノローグを再現しているが、その話者が詩人でもあるという点で特筆に値する。本章は、この詩を一種のメタポエムとして解釈し、本論文が考察してきたいくつかの重要な論点を読み込むことで、初期近代のダンの詩人としての形成についての理解がダンの作品の読み方にいかに貢献するかを実証する。

以上のように、本研究では、1590年頃から1676年までのダンの詩人像の形成について、三つの具体的な事例から詳細に論じられる。詩作を始めた初期には友人との書簡詩の交換を通じて古典と

同時代の文学的伝統に介入し、作家としての自己成型を図ったダンは、中期から後期に詩人として成熟するにつれて同時代の友人である詩人と影響を与え合う存在になった。死後には様々な言説で自らの意図とは無関係に詩人として表象されるようになるが、そこでも最大の影響を与えることになったのは彼の友人であった。本論文が提示するダンの詩人像は、それぞれの時期における個々の友人たちとの交流の間で浮かび上がる別種の姿の集合であって、それらは個別の事例研究によって微視的かつ間テクスト的に検証することによってのみ正確に観察できるものである。

(3,739 字)

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。